

# 神谷尚希先生の「算数科に取り組む意欲と、豊かな量感を育てる指導を目指して～1年「おおきさくらべ」の授業を通して～」について

愛知教育大学 高井 吾朗

まず、神谷先生の単元の計画とその実践記録を見てみると、直接比較、間接比較、任意単位による測定の順に進められている。この順に指導することは、多くの先生方にとって当たり前のことだと思うが、意外と難しいのがそれぞれの教材であろう。それぞれの段階へと進むためには、必要性を感じないといけない。例えば、直接比較から間接比較の場合は、「動かすことができない」、または「曲がっていて測れない」というものが挙げられる。これについて神谷先生の授業では、場面に応じた教材が提示されているように思われる。また、今回のねらいのひとつである「意欲」については、子どもが「何故それをしないといけないのか」と感じてしまうと、一気に下がってしまうものである。そう感じさせないために、前の授業で出た子どものつぶやきを次の時間の課題とする工夫や、本時では何を測るのか何を使うのかということを確認にすることによって、子ども達は自分なりの測り方を自分たちで見つけていったようにも見える。

量感の指導については、第4時の子ども達の活動がとても面白い。それは、教室の中で一番長いものを探そうというありふれた教材に小黒板から出てしまったら負けと条件をつけるだけで、子どもの目の付け所が変わるところである。子ども達の思考を考えると、まず小黒板がどれくらいのおおきさかということで、手で測ったりしながら、様々なものと小黒板の大きさを間接比較していく。さらに、自分の出したものが一番長いことを示すために、相手のものと直接比較したり、任意単位での測定比較を行ったりしたのであろう。つまり、この授業を通して単にそれぞれの比較、測定の方法を知り、使えるようになっただけでなく、どういう場面でどの方法を使うのが適しているのかという測り方についての価値付けが行われていたということである。

このように神谷先生の授業の特徴は、測り方を学習するというだけでなく、それぞれの測り方のよさを自分の体験を通して学んでいくということであろう。こうした子ども達自身が活動することによってよさを感じたり、他者との相互作用を通して自分の考え方を洗練したりしていくことが、算数的活動の重要な部分であり、子ども達が生み出した自分自身の量感というものである。この後、この子ども達は普遍単位による測定へと入っていく。その際も普遍単位で測る事と任意単位で測ることの共通点や相違点を見つけることで、単に普遍単位を知るだけでなくその価値を感じることができるような体験ができることを神谷先生に期待したい。